

Fig.3-7-5 出土石器 (5)  
 Fig.3-7-5 Stone tools (5)

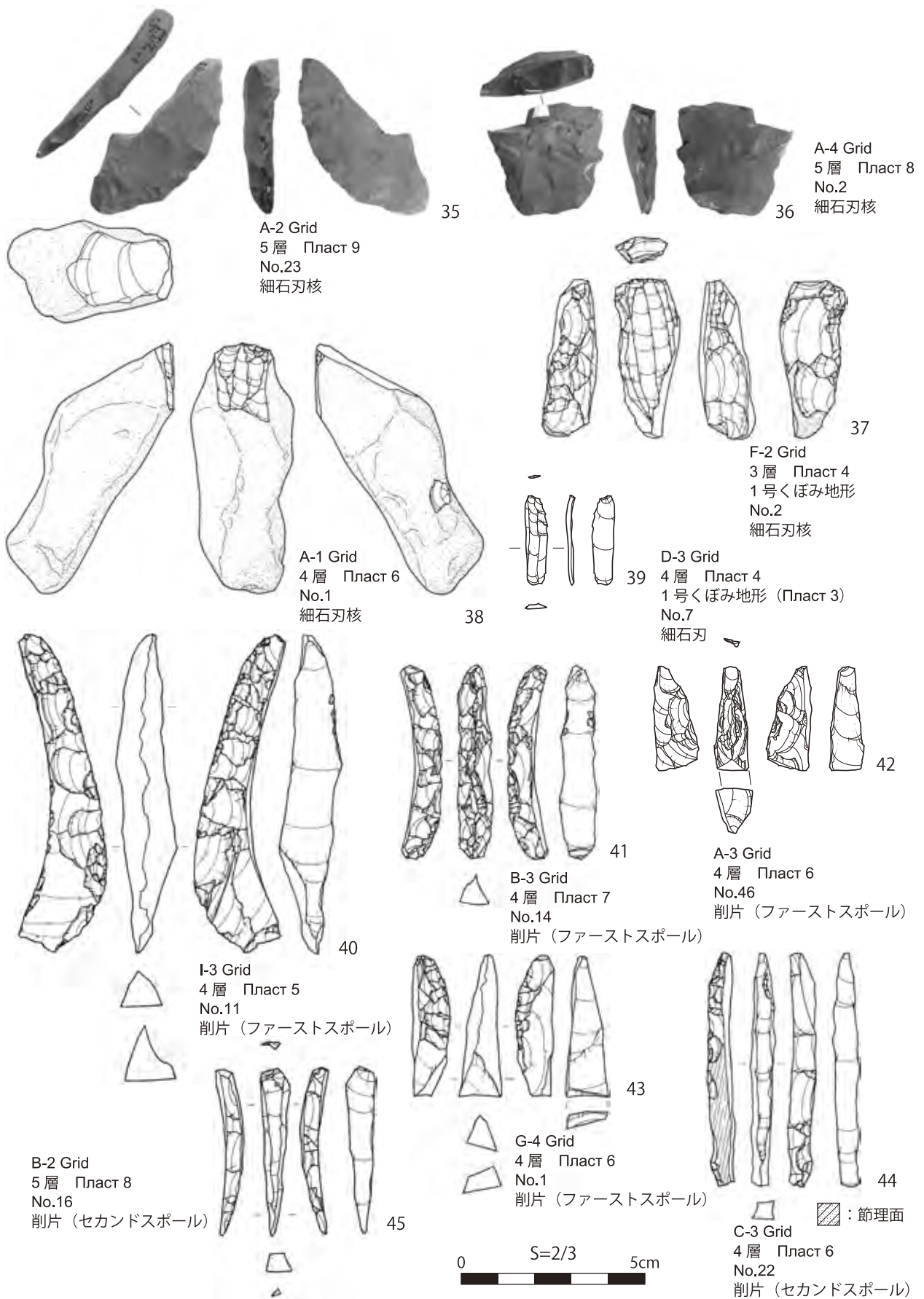


Fig.3-7-6 出土石器 (6)

Fig.3-7-6 Stone tools (6)

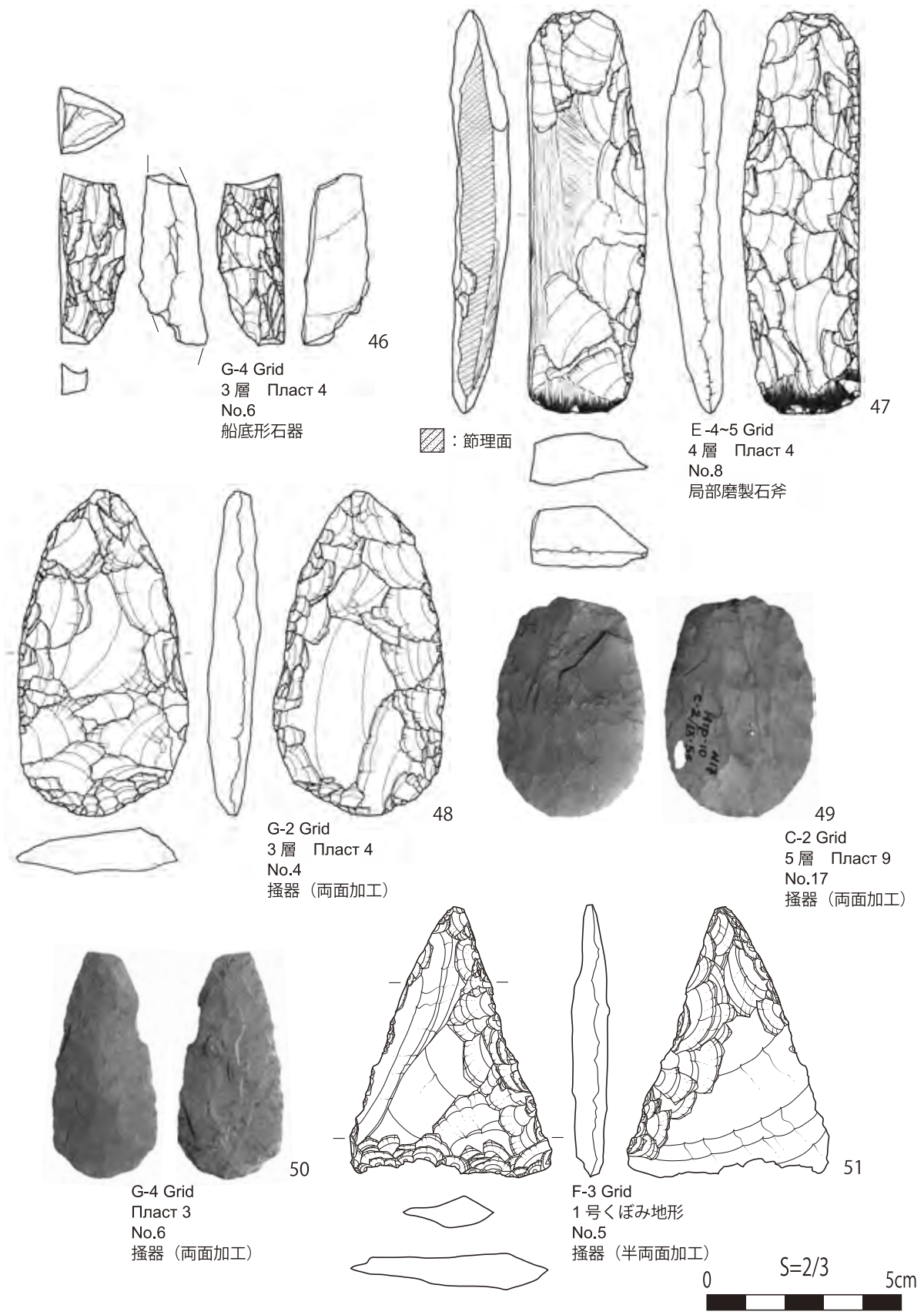


Fig.3-7-7 出土石器 (7)

Fig.3-7-7 Stone tools (7)

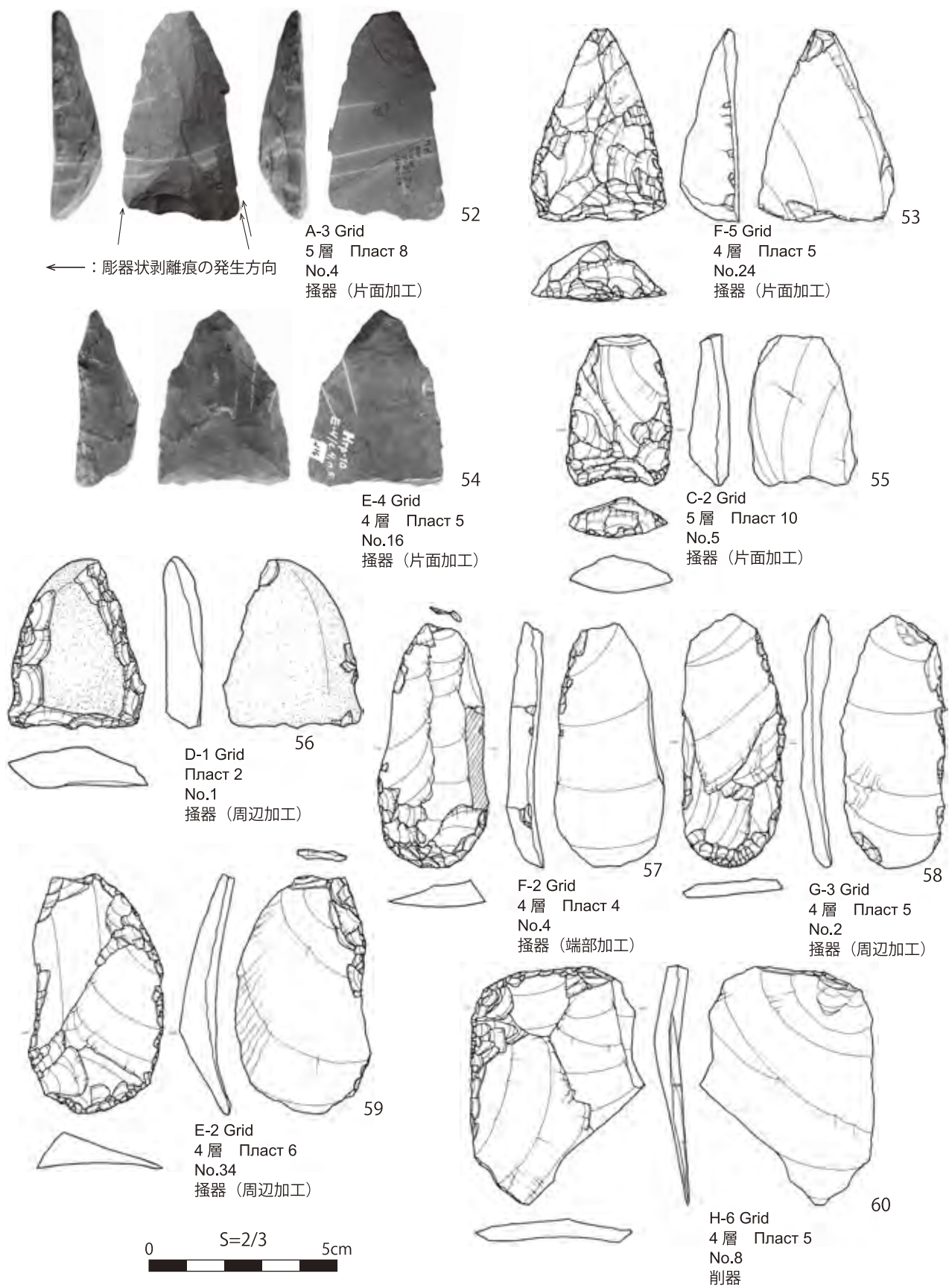


Fig.3-7-8 出土石器 (8)

Fig.3-7-8 Stone tools (8)

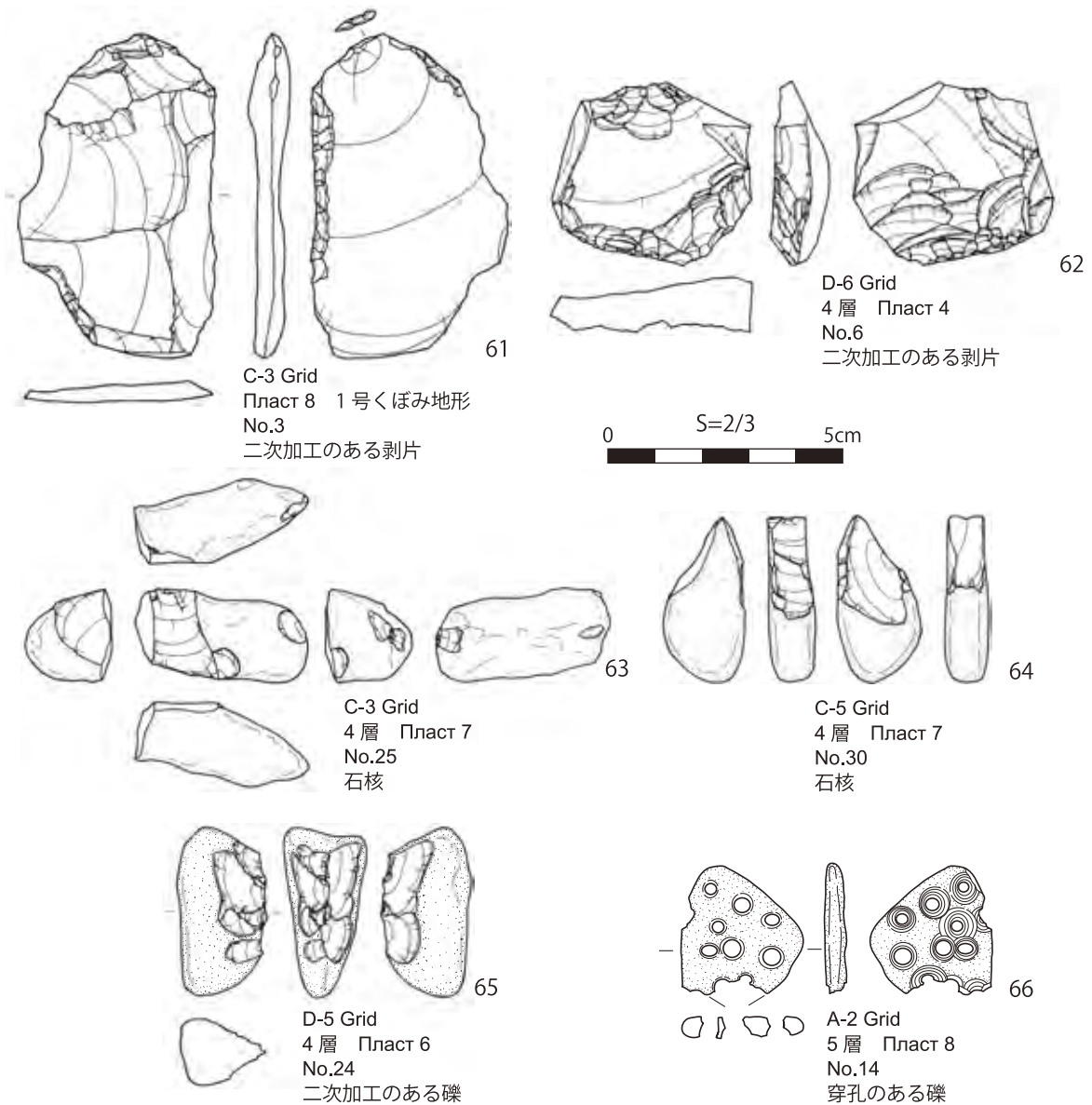


Fig.3-7-9 出土石器 (9)

Fig.3-7-9 Stone tools (9)

頭器 125 点中 87 点 (69.6 %) に同様の石材が用いられている。暗灰色の堆積岩はオシノヴァヤレーチカ 12 遺跡の使用石材でも大部分を占めており、周辺のオシポフカ文化期遺跡では最も一般的な石材である (橋詰ほか編 2016)。同様の石材はゴンチャルカ 1 遺跡でも多用され、ホルンフェルスと報告されている (Шевкомуд и Яншина 2012; Morisaki and Sato 2015)。10 に用いられている緑灰色で緻密な石材は、オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡では多用されている (橋詰ほか編 2016)。しかし、周辺のオシポフカ文化期遺跡での使用は限られており、本遺跡でも同様の傾向である。暗灰色の堆積岩が多用される本遺跡の使用石材の傾向は、オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡を除く周辺のオシポフカ文化期遺跡と共通している。

29 ~ 34 は尖頭部や搔器としての刃部を有していないため両面加工石器として分類した。29 ~ 31 は大形の、32 ~ 34 は小形の両面加工石器である。大形の両面加工石器は、尖頭部が作出された両面加工尖頭器に比べ厚みを有する。29, 30 は両面加工尖頭器や搔器、石斧などの未製品、31 はそれらの欠損品の可能性がある。32 ~ 34 の小形の両面加工石器は小形の木葉形尖頭器や両面加工の搔器などの未製品の可能

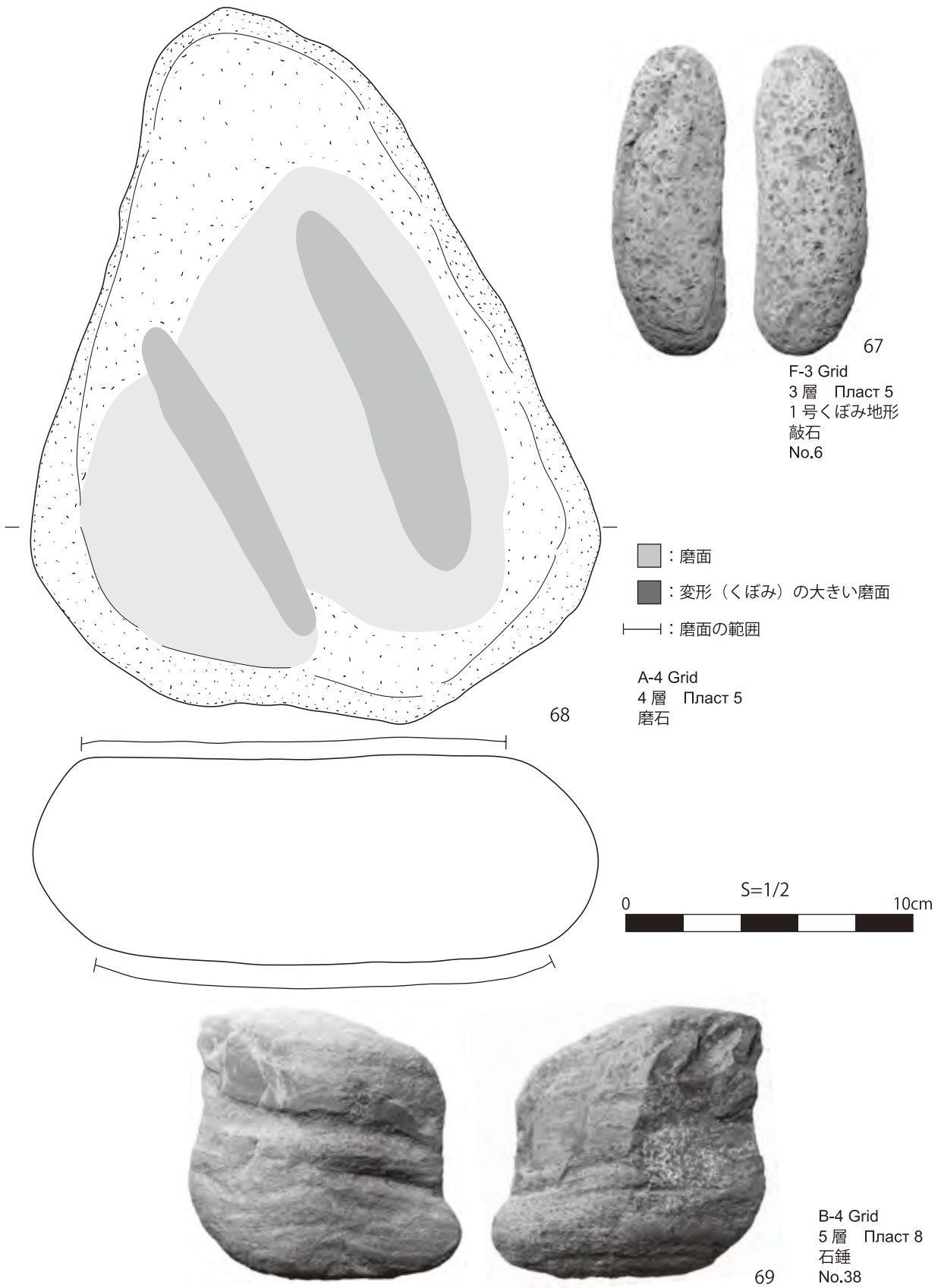


Fig.3-7-10 出土石器 (10)

Fig.3-7-10 Stone tools (10)

性がある。32は上下に折れ面を有するが、折れ面には再加工が施されている。33は表裏に礫面を残しており、近傍の河川で採取可能な暗黄褐色の頁岩の扁平な円礫が素材であると推定される。34は表面に節理面を有する素材剥片を使用し、主に正面に二次加工が施されており、表面が摩耗している。両面加工石器の石材は、29はホルンフェルス、30、32は無斑晶質安山岩、31は暗灰色で緻密な堆積岩、33は頁岩、34はやや粗粒の暗灰色の堆積岩が用いられている。

Fig.3-8で尖頭器や石鏃、両面加工の石器の大きさについて、完形もしくはほぼ完形の資料をもとに確認すると、長さとの幅の比が4:1～3:1の細身のものは全て両面加工尖頭器が占めていることが分かる。一方、尖頭部や搔器としての刃部を有していない両面加工石器は長さとの幅の比が、2:1～1:1程度の幅広の形態が多い。また、幅が2cm以下と狭い資料は、長さが6cm程度からそれ以下の両面加工尖頭器、周辺加工尖頭器、石鏃がほとんどを占めている。それぞれの器種ごとにみていくと、両面加工尖頭器には長いものから短いものまで含まれ、その中には長さとの幅の比が4:1～1:1の間に収まるものが存在し、幅も4cm～1cmのものが含まれる。このように出土点数の多さにも比例して非常に多様なサイズ、形態のものが含まれている。両面加工石器は長さとの幅が比較的近い数値で、木葉形の中～小形のものが多い。半両面加工尖頭器は幅が2cmをやや超える比較的小形の中～小形のものが2点、長さが9cm程度の比較的大形で木葉形のもの1点存在する。周辺加工尖頭器は2cm前後と幅が狭い中～小形のものが多い。その内の2点は石鏃と長さ、幅が共に非常に近い。

47は緑灰色で緻密な堆積岩（頁岩）製の局部磨製石斧である。平面形は、平坦な節理面を残しているため正面の左側縁は直線的、右側縁と基部はやや丸みを帯びている。刃部の平面形はやや丸みを帯びるが直線的である。片刃で、刃部の正面観は直線的、刃こぼれ状の微細な剥離痕を有している。左側面から裏面に、右側面から表裏に二次加工が施されているため、断面形は左側縁が平坦で右側縁がシャープな不整な台形状となっている。研磨は主に正面左中央部分と、刃部表裏の狭い範囲に施されている。特に裏面側から研磨を切る二次加工が多数施されており、器体の広い範囲を研磨した後、さらに研磨を切る二次加工が施されたと考えられる。研磨後に再加工が繰り返された可能性もある。

48～50は両面加工の、51は半両面加工の搔器である。本遺跡出土の搔器（48～59、今回図示していない資料を含め計29点）は、両面加工や半両面加工、片面加工や周辺加工といった多様な二次加工、楕円形、撥形、三角形といった多様な形態を有しており、様々な特徴を持った資料が含まれる。両面加工尖頭器や細石刃関連石器と共に本遺跡における主要な石器器種と言える。これらのうち、両面加工が11点（37.9%）で最も多く、周辺加工が7点（24.1%）、半両面加工と片面加工が各5点（各17.2%）、端部のみを加工したものが1点（3.4%）と続く。48と49は丸みを帯びた平面形、50は撥形の平面形の両面加工搔器で、

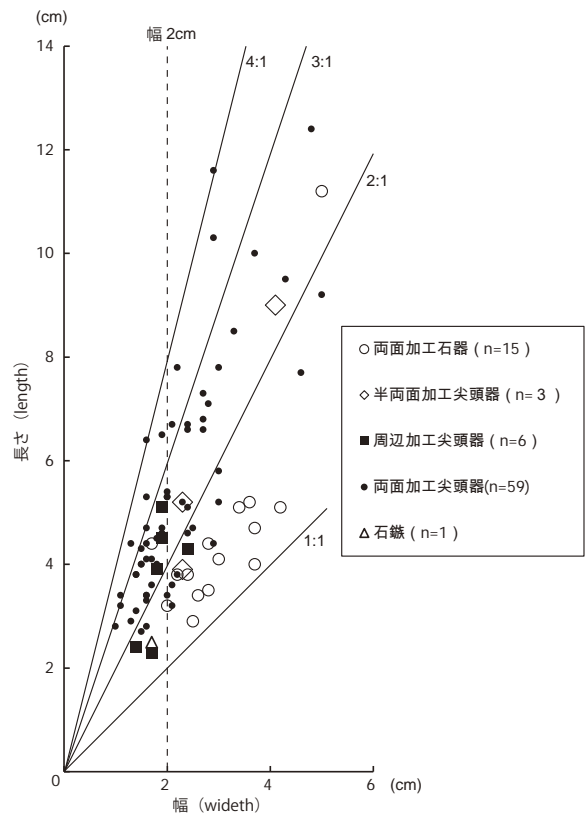


Fig.3-8 尖頭器および両面加工石器と石鏃の長幅相関図  
(完形あるいはほぼ完形の資料のみを图示)

Fig.3-8 Length/width distribution of the bifacial, semi-bifacial, and margin retouched points, blanks for the bifacial stone tools, and the arrowhead

いわゆる石筥状の形態である。51は半両面加工で、三角形の平面形が特徴的である。二次加工は正面の全面、裏面の尖頭部と左側縁を中心に施されている。48～51はいずれも暗灰色の堆積岩製である。52～55は片面加工搔器である。52, 54は素材剥片を縦位に、53, 55は横位に使用している。平面形は52～54が三角形、55は縦長の台形状で両側縁がやや丸みを帯びている。刃部の平面形は52～54は直線的、55はやや内湾する。刃角はいずれも鈍角である。52は刃部方向から両側縁に彫器状剥離が施されており、再加工と考えられる。52～55いずれも暗灰色で緻密な堆積岩製である。56は遺跡近傍の河川で採集可能なサイズの扁平な円礫（緑灰色の堆積岩）を素材に、周辺に二次加工を施すことで平面形がやや丸みを帯びた三角形となっている。素材の礫面を大きく残しており、完成形に厚みや平面形の近い礫が素材として選択されたと推定できる。そのほかに57～59のような素材の縦長剥片を縦位に使用し、端部や周辺を加工した縦型の搔器がある。57と59は暗灰色でやや粗粒な堆積岩、58は暗灰色で緻密な堆積岩製である。

本遺跡出土の剥片石器、例えば28のような周辺加工尖頭器、57～58のような剥片素材の搔器や、60のような削器、61のような二次加工のある剥片や、微細剥離痕のある剥片には、素材剥片の背面が多方向から生じた剥離面で構成されていたり、打面が切子状であったり、リップが発達しているなど、両面加工の石器製作に伴って生じるいわゆるポイントフレイクにみられる諸特徴を有する剥片が素材として用いられている例が多い。このように、本遺跡での両面加工尖頭器や両面加工搔器などの両面加工の石器製作には、そのほかの剥片石器への素材供給の役割も組み込まれていたと推定できる。62の二次加工のある剥片は上下あるいは左右の対向する位置に二次加工が施されており、両極打撃によって作出されている可能性がある。60～62のいずれも暗灰色で緻密な堆積岩製である。

### 3-5-1-2 細石刃関連の石器

細石刃関連資料には、①35, 36のような両面加工の母型から削片を剥離して打面が作出される細石刃核と、そうした母型から剥がされた削片（40～44）、②37, 38のような遺跡の近傍で採集可能な、中～小形の珪質な石材の円～垂円礫を素材とした細石刃核に大まかに区分できる。②は①に比べ簡略な打面の作出、下面調整、側面調整などを経て細石刃の剥離がおこなわれる。特に38は打面を一回の剥離によって作出したのみで細石刃の剥離がおこなわれている。そして①と②には形態や調整の違いだけでなく、使用される石材にも違いが認められる。どちらでも珪質あるいは緻密な石質の石材が用いられているが、①の細石刃核には暗灰色で緻密な堆積岩が多く用いられ、削片にも同様の石材によるものが7点中3点に用いられている。②には遺跡近傍で採集可能な中～小形の円～垂円礫（頁岩や碧玉など珪質な石材）が選択されている。ただし、①の中の削片には、暗灰色で緻密な堆積岩（42, 44, 45）のほかに、40は珪質頁岩、41, 43はチャート、そのほかの1点に頁岩が用いられていてヴァリエティが豊富である。35と36は両面加工の母型から削片を剥いで打面を作出する湧別技法類似の技術が用いられている。ただし、35と36のいずれも細石刃剥離面の末端にヒンジやステップが発生しており、十分な長さの細石刃を剥離できていない。また、36は尖頭器などの欠損品が転用されている可能性がある。その場合、折れ面に当たる箇所から削片を剥いでそこを打面として、尖頭器の側縁に当たる箇所で細石刃の剥離がおこなわれている。

削片は40～43と図示していない1点を含めた計4点がファーストスポール、44, 45がセカンドスポールである。いずれも両面加工の母型から削片を剥いで打面を作出する、湧別技法類似の技術を用いた細石刃核から剥離された可能性が高い。40, 41, 43には特に珪質で良質な石材が用いられている。37は簡略な打面作出と、主に左側面には裏面から、右側面には正面から調整が施され方柱形の細石刃核となっている。38は打面に設定し易い平坦面を有する完成形に近い形態の垂円礫が素材として選択されている。た



だし、細石刃剥離面の長さはいずれも短く、十分な長さの細石刃の剥離ができていない。

細石刃は図示した 39 のほかに 26 点存在し、計 27 点が出土している。これらは、湧別技法類似の技術による細石刃核から剥離されたものと、遺跡近傍で採集可能な中～小形の珪質石材の円～亜円礫を素材とした細石刃核から剥離されたものの、いずれから生じたのかを即断することはできない。細石刃核や削片の使用石材から推定すると、頁岩や玉髓、碧玉などの石材を使用したものは遺跡近傍の河川で採集可能な中～小形の珪質石材の円～亜円礫を素材とした細石刃核から剥離された可能性がある。一方、珪質頁岩、チャート、暗灰色で緻密な堆積岩製の細石刃は、両面加工の母型から削片を剥ぎ打面を作出する湧別技法類似の技術を用いた細石刃核から剥離された可能性がある。

46 は暗灰色で緻密な堆積岩製の舟底形石器である。上下を折れによって失っている。断面が三角形で、正面中央の稜線上から左右の側面へ二次加工が施されている。さらに、削片の腹面あるいは分厚い剥片の平坦な腹面（実測図の裏面）を打面として左右両側面に二次加工が施されている。

### 3-5-1-3 その他

63 は頁岩製、64 は碧玉製の石核である。図示した 2 点を含めた計 22 点の石核の中で 5 cm を超えるのは 4 点のみでその中でも最大のものは 5.5 cm で、中～小形の石核がほとんどである。剥片石器の使用石材やサイズからは、本遺跡出土の剥片石器への素材供給は主に両面加工の石器製作時に生じた剥片が担っていると推定でき、こうした石核からの素材供給は限定的であったと考えられる。また、22 点中 18 点が遺跡近傍の河川で採集可能な中～小形の頁岩、玉髓、碧玉の円～亜円礫を素材としている。65 は二次加工のある礫で、玉髓製である。二次加工のある礫は図示した 65 を含めて 8 点出土しているが、そのうち 6 点が中～小形の頁岩や珪質頁岩、玉髓などの遺跡近傍の河川で採集可能な円～亜円礫製である。これらの中には細石刃核の母型や楔形石器などが含まれている可能性がある。

そのほかに、66 のような扁平な円礫の表裏に回転穿孔がおこなわれて穴があげられた、穿孔のある礫がある。緑灰色で緻密な堆積岩製である。敲石は 67 の棒状で多孔質安山岩石製のものと、玉髓の亜円礫製のものの計 2 点が出土している。68 の砂岩製の磨石は大形で表裏両面に磨面が存在する。69 の砂岩製の石錘は、両側縁への簡略な二次加工によって抉り部を作出しているが、もともと完成形に近い抉りのある平面形の礫が選択されており、素材の礫の変形の程度は小さい。正面に横軸方向に伸びる溝状の痕跡が確認できる。敲打や細い接触対象による研磨によって生じたと推定できる。石錘や磨石はオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡（橋詰ほか編 2016）でも出土している。さらに、2 点のみであるが遺跡近傍の河川で採集可能なサイズと質の玉髓の円礫（原石）が出土している。また、発掘現場において石刃が含まれる可能性を考慮して、12 点の縦長剥片が 3 次元の出土位置情報を記録して取り上げられた。これらの中に腹面の剥離方向と一致する、あるいは対向する剥離面が、背面に連続して残されているなど、定形的な縦長剥片が連続して剥離されたと判断できるものはなかった。これらの中には背面が多方向から生じた剥離面によって構成されているものもあり、使用石材も両面加工の石器に多用されている暗灰色の堆積岩が 12 点中 10 点で用いられている。本遺跡では石刃核も確認されていないため、これらの縦長剥片は石刃ではなく、両面加工の石器製作中に偶発的に発生したと解釈して矛盾はないと考えられる。

以上、3 次元の出土位置情報を記録して取り上げられた石器 351 点について事実記載をおこなった。本遺跡ではそのほかにグリッド単位で人工層位ごと一括して取り上げた剥片や礫が多く出土しているが、台帳が整備されておらず十分な整理ができなかったため、これらに対する分析はおこなっていない。

（橋詰）

## 3-5-2 土器

### 3-5-2-1 はじめに

出土土器について、出土遺構、出土層位、調査年次別に記載する。掲載資料は形態的な特徴を読み取ることが出来たものを中心に抽出した。抽出は報告者（村上）が任意におこなったものであるが、本遺跡出土資料の特徴を理解する上で、過不足ないものとする。器面調整の内、筋状の痕跡を残すものを「条痕（調整）」とした。この調整の工具は、ハケメ調整と同様のものである可能性が最も高いが、他の可能性が排除出来ないため、ここでは「ハケ」あるいは「ハケメ（調整）」の用語は使用しない。

以下の記載では、各個別資料（Fig.3-9-1：1～23，Fig.3-9-2：24～51，Fig.3-9-3：52～57）について指し示す場合、1～57までの各資料の通し番号を使用することとし、Fig.3-9-1，Fig.3-9-2，Fig.3-9-3などの表記は省略する。なお、図化した土器の各属性についてはTable 3-2-1～2に示した<sup>1)</sup>。

### 3-5-2-2 1号くぼみ地形出土資料（1～12）

1～4は口縁部片である。1は直立する。外面は摩滅し、調整は不明。内面は横方向の条痕。口縁端部は平坦で、浅い押圧が残る。面取りの後に押圧したと考えられる。内外面とも暗灰茶褐色。胎土に長石、径1～2mmの小礫を含み、外面に繊維痕と考えられる痕跡が認められる。焼成は良好。2は、若干内弯して立ち上がる。内外面ともに横方向の条痕。口縁端部は面取りされる。口縁端部直下に穿孔があるが、焼成前のものか後のものかは判然としない。内外面とも暗茶褐色。胎土に長石、チャートを含む。焼成は良好。3は、ほぼ直立する。外面は格子目状の浅い圧痕が残る、工具押圧痕と考えられる。櫛歯状工具によるものか。炭化物が付着する。内面はナデか。口縁端部は平坦で、面取りの後、工具押圧が施される。櫛歯状工具によるものか。口縁端部直下の焼成前穿孔は、外側から内側に向けて穿孔されている。内外面とも暗茶褐色。胎土に長石、少量の雲母、径1mm程の小礫を含む。焼成は良好だが、摩滅が激しい。4は、緩やかに内弯する。外面は口縁端部直下に工具押圧が巡り、その下に工具ナデ付け痕が巡る。工具の押圧とナデ付け後にナデられている。内面は摩滅し、調整は不明。口縁端部は平坦で、浅く押圧される。外面は茶褐色、内面は暗灰褐色。胎土に長石、径1mm程の小礫を含み、内面には繊維痕が認められる。焼成は良好。

5は、口縁部直下の肥厚帯か。外面は摩滅し、調整は不明。内面はナデ。外面は褐色、内面は暗茶褐色。胎土に多量の長石、少量の雲母、径1mm程の小礫を含む。繊維痕が多数認められる。焼成は良好だが、摩滅が激しい。

6～12は胴部片である。6は、やや内弯気味に立ち上がる。外面の調整は判然としない。内面は横方向の条痕。内外面とも黒褐色。胎土に長石、石英を含み、径1～4mmの小礫が多い。焼成は良好で、比較的硬質である。8と同一個体か。7は、やや内弯して立ち上がる。内外面とも摩滅。外面は暗茶褐色、内面は褐色。胎土に花崗岩、少量の雲母を含み、径1～2mmの小礫が多い。焼成は良好だが、摩滅が激しい。8は、直線的に立ち上がるが、傾き不明。内外面とも摩滅。外面は暗茶褐色、内面は黒褐色。胎土に長石を含み、径1～4mmの小礫が多い。焼成は良好。6と同一個体か。9は、やや内弯して立ち上がる。外面は摩滅。内面は横方向の条痕。外面は暗茶褐色、内面は黒褐色。胎土に石英、長石を含み、径1～3mmの小礫が多い。焼成は良好だが、摩滅が激しい。断面に粘土紐の接合面が認められる。10は、直線的に立ち上がる。外面は櫛歯状工具押圧の後ナデか。内面はナデ。外面は暗黄茶褐色、内面は暗灰茶褐色。胎土に長石、径1mm程の小礫を含む。焼成は良好。11は、内弯気味に立ち上がる。内外面ともに摩滅。外面は黒褐色、内面は暗茶褐色。胎土に長石を含み、径3mm程の小礫が多い。繊維痕が認められる。



Fig.3-9-1 出土土器 (1)  
 Fig.3-9-1 Pottery (1)

焼成は良好だが、脆い。12は、直線的に外に開き、下端の破面に擬口縁の受けが見られる。外面は摩滅。内面はナデか。外面は黄褐色、内面は茶褐色。胎土に長石、チャート、クサリ礫を含み、径2～5mmの粗い小礫が多い。焼成は良好だが、摩滅が激しい。底部直上の破片か。

### 3-5-2-3 2004年調査3層出土資料(13～16)

13は、口縁部片で、外側に開く。内外面ともにナデ。口縁端部はナデで、丸く収める。外面は褐色、内面は暗茶褐色。胎土に長石、径1mm弱の小礫を含む。焼成はやや不良で、軟質。14と同一個体。

14～16は、胴部片である。14は、外に開き、直線的に立ち上がる。内外面ともにナデで、内面は起伏が顕著である。外面は褐色、内面は暗茶褐色。胎土に長石、径1mm弱の小礫を含む。焼成はやや不良で、軟質。13と同一個体である。15は、胴部屈曲部片で、屈曲部より上は直立する。上端部は擬口縁が認められる。外面は、屈曲部より下がナデ、上は摩滅する。工具押圧痕と思われる痕跡が認められ、横方向に巡るか。内面は横方向の条痕。外面は黒褐色・明茶褐色、内面は暗黄茶褐色。胎土に長石、径1～2mmの小礫を含む。焼成は良好。16は、直線的に立ち上がる。外面は横方向の条痕の後、ナデ。剥落痕が見られる。土器の生地に混入した種子が剥落したか。内面は横方向の条痕。内外面ともに明茶褐色。胎土に径1mm程の小礫を含む。焼成は良好だが、脆い。口縁部に近い部位か。

### 3-5-2-4 2003年調査セクター1,4層出土資料(17～23)

17・18は、口縁部片である。17は、ほぼ直立する。外面は太目の櫛歯状工具圧痕を斜位に施した後、ナデ。内面は摩滅。口縁端部は丸く収め、工具押圧を加える。口縁部直下の破面に穿孔が認められるが、焼成前のものか後のものかは不明。外面は暗灰茶褐色、内面は灰茶褐色。胎土に径1～3mmの小礫を含む。焼成は良好。18は、胴部が屈曲し、口縁部は内傾する。外面はナデ。口縁端部直下に3単位の櫛歯状工具による押圧が巡り、その下に、間隔を空けて押圧が垂下する。内面は摩滅のため、調整不明。指によるナデか。口縁端部は丸く収める。摩滅により不鮮明だが、工具刺突あるいは押圧が加わる。外面は暗茶褐色・褐色、内面は褐色。胎土は若干の雲母、クサリ礫を含み、径1mm弱の小礫と径3～4mmの小礫が多い。繊維痕が認められる。焼成は良好だが、摩滅が激しい。摩滅により、器壁の厚さは部位により異なる。底部を欠く。鉢形を呈するか。

19～23は胴部片である。19は、内弯気味に立ち上がる。外面はナデが基調だが部分的に条痕が入り、施文が見られる。凹線が巡り、中には刺突が施される。左側から工具先端により刺突されたもので、櫛歯状工具や縄の押圧ではない。その下には、部分的に施された条痕が残る。さらに下には、工具刺突列が巡る。内面は丁寧なナデ。上端破面に擬口縁が認められる。外面は褐色、内面は暗茶褐色。胎土に長石を含み、径1mm強の小礫が多い。繊維痕は見られない。焼成は良好だが、軟質である。口縁部に近い部位か。20は、直線的に立ち上がる。外面は縦方向の条痕。内面は摩滅のため調整不明。外面は茶褐色、内面は暗茶褐色。胎土に長石、少量の雲母を含み、径1～3mmの小礫を含む。焼成は不良で、かなり軟質。外面の条痕が縦方向であることから、胴部下位の破片の可能性が高い。21は、胴部屈曲部片である。外面はナデで、原体不明の方形工具(櫛歯状工具か)押圧が加わる。屈曲部下位の内面はナデ調整され、積み上げられた屈曲部上位の積み上げ部分破面にナデが及ぶ。このことから、屈曲部下部を成形後、器面をナデ、その後に屈曲部上部を積み上げていることがわかる。外面は黄褐色、内面は暗灰褐色。胎土に赤味を帯びたクサリ礫を含み、径2～3mmの小礫が多い。焼成は良好だが、残存状態は悪い。色調、胎土、質感から、22と同一個体と考えられる。22は、直線的に立ち上がる。外面は丁寧なナデだが、剥離が激しい。